

## 第36期定時株主総会招集ご通知に際しての 電子提供措置事項

- 事業報告  
業務の適正を確保するための体制及び当該体制の運用状況
- 計算書類  
株主資本等変動計算書  
個別注記表

第36期（2022年1月1日から2022年12月31日まで）

株式会社シノプス

上記の事項につきましては、法令及び当社定款第15条第2項の規定に基づき、書面交付請求をいただいた株主様に対して交付する書面には記載しておりません。

## 業務の適正を確保するための体制及び当該体制の運用状況

### (1) 業務の適正を確保するための体制についての決定内容の概要

取締役の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制その他会社の業務の適正を確保するための体制についての決定内容の概要は以下のとおりであります。

なお、2022年3月11日の取締役会において、「内部統制システムの構築に関する基本方針」を改定しており、改定後の内容は以下のとおりであります。

- ① 取締役、執行役員および使用人その他これらの者に相当する者の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
  - i) 当社は、「われわれは在庫に関わる“人”、“もの”、“金”、“時間”、“情報”を最適化するITソリューションを提供し、限りある資源を有効活用することで、広く社会に貢献する。」という基本理念を共通の志として、企業市民として、社会的な倫理の上に組織の意思決定を行い、事業活動を展開する。
  - ii) 前項の理念の実践のため、「行動指針」に基づき、法令・社会倫理の遵守を当社全ての取締役、執行役員および使用人等の行動規範とする。取締役および執行役員は、法令・定款ならびに企業倫理の遵守を率先垂範して行うとともにコンプライアンス経営の維持・向上に積極的に努める。
  - iii) 当社の取締役、執行役員および使用人等の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するため、コンプライアンス委員会を設置し、同委員会において、当社全体のコンプライアンス活動の推進を行い、コンプライアンス推進に関する重要課題を審議する。また、同委員会および管理部門により、定期的に教育・研修活動を行うとともに、当社全体のコンプライアンス体制の構築・推進を行う。
  - iv) コンプライアンス委員会は、同委員会の審議内容および活動を、適宜、取締役会および内部監査室に報告する。
  - v) 取締役および執行役員が当社のコンプライアンス上の問題を発見した場合は、速やかにコンプライアンス委員会に報告する。また、内部通報制度を設置し、当社の使用人等がコンプライアンス上の問題点について社外に設置した内部通報窓口へ直接報告できる体制とし、情報の確保に努め、報告を受けたコンプライアンス委員会は、その内容を調査し、必要に応じて関連部署と協議し、是正措置を採り、再発防止策を策定し、当社全体にこれを実施させる。
  - vi) 内部監査室を設置し、当社のコンプライアンスの状況・業務の適正性に関する内部監査を実施する。内部監査室はその結果を、適宜、代表取締役に報告する。
  - vii) 当社の財務報告の適正性の確保に向けた内部統制体制を整備・構築する。
  - viii) 取締役および執行役員は、当社において、反社会的勢力との関係断絶および不当要求への明確な拒絶のための体制を構築し、推進する。
- ② 取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制
  - i) 取締役および執行役員は、株主総会議事録、取締役会議事録、重要な意思決定に関する文書等（電磁的記録を含む。以下同じ。）その他取締役の職務の執行に係る重要な情報を法令および社内規程に基づき保存・管理する。
  - ii) 前項の文書等は、取締役が必要に応じて閲覧可能な状態を維持する。
  - iii) コンプライアンス委員会において、個人情報を含む情報の保護・保存のみならず、情報の活用による企業価値向上を含めた情報セキュリティ・ガバナンス体制を構築・推進する。
- ③ 損失の危険の管理に関する規程その他の体制
  - i) 当社のリスクマネジメントの基本方針は、取締役会において決定される。
  - ii) 業務執行におけるリスクは、各部門の管掌役員がその対応について責任を持ち、重要なリスクについて、取締役会において、分析・評価を行い、改善策を審議・決定する。

- iii) 当社の経営上重要なリスクは、リスク管理委員会において、当社全体の業務遂行上のリスクおよび品質リスクをそれぞれ網羅的・総括的に管理する。また、必要に応じ、当該リスクの管理に関する規程の制定・ガイドラインの策定・研修活動の実施等を指示して行う。
  - iv) 新たに生じた当社の経営上重要なリスクは、取締役会において、速やかに対応の責任を持つ執行役員を選定し、対応について決定する。
- ④ 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- i) 「取締役会規程」を定め、取締役会の決議事項および報告事項を明確にするとともに、「稟議規程」等の機関決定に関する規程を定め、決裁権限を明確にする。
  - ii) 業務執行の監査・監督の機能強化を図るため、取締役会に独立した立場の社外取締役を含める。
  - iii) 取締役が取締役会において十分に審議できるようにするため、取締役会資料を事前に送付するとともに、取締役から要請があった場合には、取締役会資料に追加・補足を行う。
  - iv) 「組織規程」を定め、業務遂行に必要な職務の範囲および責任を明確にする。
- ⑤ 監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項ならびに当該使用人の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性に関する事項
- 監査等委員会が必要とする場合、監査等委員会の職務の補助をする使用人を配置する。使用人の異動、評価等は、監査等委員会の意見を尊重して決定し、取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性を確保する。
- ⑥ 監査等委員でない取締役および使用人が監査等委員会に報告をするための体制その他の監査等委員会への報告に関する体制
- i) 代表取締役および監査等委員でない取締役は、取締役会において、随時その担当する業務執行の報告を行う。
  - ii) 監査等委員でない取締役、執行役員および使用人等は、選定監査等委員が事業の報告を求めた場合または業務および財産の調査を行う場合は、迅速かつ的確に対応する。
  - iii) 監査等委員でない取締役、執行役員および使用人等は、法令等の違反行為等、当社に重大な損害を及ぼすおそれのある事実が発見された場合は、ただちに監査等委員に対して報告を行う。
  - iv) コンプライアンス委員会は、定期的に監査等委員に対し、当社における内部通報の状況の報告を行う。
- ⑦ 内部通報制度を利用し監査等委員会に報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- 当社の取締役、執行役員および使用人等は、社外に設置した内部通報窓口へ直接報告を行うことができ、当該報告を行ったことを理由として不利な取扱いを行うことを内部通報制度に基づいて禁止する。
- ⑧ 監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払または償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項
- 監査等委員から費用の請求があるときは、職務の執行に必要でないと認められた場合を除き、当該費用を負担しまたは債務を処理する。なお、監査等委員会は、職務上必要と認められる費用について、毎年、あらかじめ一定額の予算を計上する。

- ⑨ その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制  
監査等委員会は、定期的に代表取締役および会計監査人と意見を交換する機会を設ける。

**(2) 業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要**

当事業年度における内部統制システムの運用状況の概要は以下のとおりであります。

- ① コンプライアンスに関する取り組み
- ・代表取締役を委員長とするコンプライアンス委員会を四半期ごとに開催し、内部通報の有無および法改正情報の確認、行動基準の遵守状況の報告、その他コンプライアンスに関する課題の把握と対応策について審議しております。
  - ・取締役、執行役員および使用人等を対象としたコンプライアンスに関する研修を実施し、コンプライアンス意識の向上を図っております。
  - ・当社各部門を対象とした内部監査を通じて、法令等遵守状況の確認を行い、必要に応じて適宜改善を図っております。
- ② 内部監査体制
- 代表取締役直轄の内部監査室により、各部門の業務遂行に関する監査、財務報告に係る内部統制に関する監査を実施し、その結果を代表取締役および取締役会に対して報告しております。
- ③ 効率的な取締役の職務執行を確保するための体制
- 当社は執行役員を選任し、業務執行の責任の一部を担っております。執行役員は担当する業務執行の状況を定時の取締役会で報告しております。
- ④ 監査等委員監査体制
- 監査等委員は業務執行に関する情報収集および監視のため、コンプライアンス委員会その他重要な会議への出席や稟議書、契約書等重要書類の閲覧を行っております。また、監査の実効性を高めるため、内部監査室と連携し、定期的に意見交換を行っております。

## 株主資本等変動計算書

(2022年1月1日から  
2022年12月31日まで)

(単位：千円)

	株 主 資 本								新 予 約 株 権	純 資 産 計	
	資 本 金	資 本 剰 余 金			利 益 剰 余 金		自 株	己 式			株 主 資 本 計
		資 本 準 備 金	そ の 他 資 本 剰 余 金	資 本 剰 余 金 計	そ の 他 利 益 剰 余 金 計	利 益 剰 余 金 計					
当 期 首 残 高	420,763	381,193	—	381,193	634,795	634,795	△233	1,436,519	4,137	1,440,657	
当 期 変 動 額											
新 株 の 発 行	4,773	4,773		4,773				9,546		9,546	
当 期 純 利 益					153,496	153,496		153,496		153,496	
自 己 株 式 の 取 得							△89,974	△89,974		△89,974	
自 己 株 式 の 処 分			817	817			31,482	32,300		32,300	
株 主 資 本 以 外 の 項 目 の 当 期 変 動 額 ( 純 額 )									△2,466	△2,466	
当 期 変 動 額 合 計	4,773	4,773	817	5,590	153,496	153,496	△58,491	105,368	△2,466	102,902	
当 期 末 残 高	425,537	385,967	817	386,784	788,292	788,292	△58,725	1,541,888	1,670	1,543,559	

(注) 金額は千円未満を切り捨てて表示しております。

## 個別注記表

### 1. 重要な会計方針に係る事項に関する注記

- (1) 棚卸資産の評価基準及び評価方法
- 仕掛品 個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。
- (2) 固定資産の減価償却の方法
- ① 有形固定資産 定率法を採用しております。ただし、2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。  
なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。
- |           |        |
|-----------|--------|
| 建物        | 6年～50年 |
| 工具、器具及び備品 | 2年～15年 |
- ② 無形固定資産
- ・ 自社利用のソフトウェア 社内における見込利用可能期間（5年以内）に基づく定額法を採用しております。
  - ・ 市場販売目的のソフトウェア 見込販売収益に基づく償却方法と見込販売期間（3年以内）の均等配分額を比較し、いずれか大きい金額を計上する方法を採用しております。
- (3) 引当金の計上基準
- ① 貸倒引当金 売上債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。  
なお、当事業年度においては、貸倒実績はなく、また貸倒懸念債権等もないため、貸倒引当金を計上しておりません。
- ② 製品保証引当金 製品の販売後、無償で補修する費用の支出に備えるため、過去の瑕疵補修費用の売上高に対する実績率及び個別に追加原価の発生可能性を基礎とした見積額を計上しております。
- ③ 受注損失引当金 受注案件に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末における受注案件のうち、損失が発生する可能性が高く、かつ、その金額を合理的に見積ることができるものについて、その損失の見込額を計上しております。
- ④ 退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見積額に基づき計上しております。退職給付引当金及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。
- (4) 収益及び費用の計上基準
- 当社と顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は以下のとおりであります。
- ① クラウドサービス クラウドサービスの主な内容は、「sinops-CLOUD」を中心としたクラウド環境下で提供するサービスであり、顧客との継続的な利用契約に係るサービスを提供しているため、顧客との契約期間にわたり履行義務が充足されるものと判断し、契約により定められたサービス提供期間にわたって収益を認識しております。ただし、初期登録料に関しては登録が完了した時点で履行義務を充足すると判断し、登録が完了した時点で収益を認識しております。
- ② ライセンス販売 ライセンス販売の主な内容は、「sinops-R6」を中心としたパッケージ製品（顧客の自社内のサーバー等にインストールして利用するソフトウェア）のライセンス販売であり、ライセンスを顧客に供与する際の約束の性質は、知的財産を使用する権利の提供であるため、ライセンスの供与を開始した一時点で収益を認識しております。

- ③ 導入支援サービス 導入支援サービスの主な内容は、クラウドサービス又はライセンスを販売した顧客に対して、本部・店舗・拠点での運用構築支援やインターフェイス等の開発を行うこととあります。収益の認識は契約形態により異なっております。本部・店舗・拠点での運用構築支援をはじめとする、準委任契約による導入支援サービスは、顧客との契約における義務を履行するにつれて顧客が便益を享受することから、一定の期間にわたり履行義務を充足すると判断し、契約により定められたサービス提供期間にわたって収益を認識しております。また、インターフェイス等の開発をはじめとする請負契約の導入支援サービスは、成果物が定められており、成果物の検収時点で顧客が便益を享受できるようになるため、顧客が成果物を検収した時点で収益を認識しております。
- ④ サポートサービス サポートサービスの主な内容は、パッケージ製品の保守契約であり、顧客との契約期間にわたり履行義務が充足されるものと判断し、契約により定められたサービス提供期間にわたって収益を認識しております。

## 2. 会計方針の変更に関する注記

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することといたしました。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当事業年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当事業年度の期首の繰越利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、収益認識会計基準等の適用による当事業年度の損益及び繰越利益剰余金の当期首残高に影響はありません。

収益認識会計基準等を適用したため、前事業年度の貸借対照表において、「流動負債」に表示していた「前受金」は、当事業年度より「契約負債」に含めて表示することとしております。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することといたしました。なお、これによる当事業年度の計算書類に与える影響はありません。

また、「金融商品に関する注記」において、金融商品の時価の適切な区分ごとの内訳等に関する事項等の注記を行うことといたしました。

### 3. 重要な会計上の見積りに関する注記

(無形固定資産（ソフトウェア）の減損)

(1) 当事業年度の計算書類に計上した金額

無形固定資産	227,399千円
(うちソフトウェア)	219,352千円)

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

当社では、減損の判定にあたっては、概ね独立したキャッシュ・フローを生み出す最小の単位を基礎とした資産グループ単位により行っております。これらの資産グループに関する減損の兆候を把握するため、資産グループの営業損益の悪化、資産グループの使用範囲又は方法について回収可能価額を著しく低下させる変化等について検討を行っております。

減損の兆候を把握した資産グループに対しては、割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回る場合に減損損失を認識しております。なお、割引前将来キャッシュ・フローの総額の見積りについては、中期経営計画等を基礎としています。

ソフトウェアの大半は、クラウドサービスを提供するために自社で開発したものであり、クラウド事業の資産としてグルーピングしています。当事業年度においては、当該資産グループの営業損益はプラスであり、資産グループの使用範囲又は方法について回収可能価額を著しく低下させるような変化もなかったため、減損の兆候は認められませんでした。

なお、割引前将来キャッシュ・フローの見積りには不確実性を伴うことから、事業計画どおりに推移しなかった場合には、翌事業年度以降の計算書類に重要な影響を与える可能性があります。

(受注損失引当金)

(1) 当事業年度の計算書類に計上した金額

受注損失引当金	914千円
---------	-------

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

未完了の導入支援サービスに係る将来の損失に備えるため、当事業年度末における案件のうち、損失の発生が見込まれ、かつ、その金額を合理的に見積ることができるものについて、その損失見込額を計上しております。当事業年度末においては、一部損失の発生が見込まれる案件があったため、当該損失見込み金額を受注損失引当金として計上しております。

当社の導入支援サービスは、目標とする導入効果をユーザーと合意した上で導入支援プロジェクトの完了条件を決め、想定される難易度及び工数に基づいて総原価見積りを作成し、適正な利益率を確保した上でプロジェクトを受注しておりますが、想定以上に導入効果が出ない場合や、ユーザーとプロジェクトの完了条件に認識違いが発生した場合等、予期せぬトラブルやスケジュール変更等により、当初の見積りから工数が大幅に増加する可能性があります。当初の見積りから工数が大幅に増加した場合は、翌事業年度の計算書類において、受注損失引当金の金額に重要な影響を与える可能性があります。

### 4. 貸借対照表に関する注記

(1) 有形固定資産の減価償却累計額 39,567千円

(2) 当座貸越契約

当社は、運転資金の効率的な調達を行うため、取引銀行6行と当座貸越契約を締結しております。当事業年度末における当座貸越契約に係る借入未実行残高等は次のとおりであります。

当座貸越極度額	950,000千円
借入実行残高	－千円
差引額	950,000千円



## 5. 株主資本等変動計算書に関する注記

- (1) 当事業年度の末日における発行済株式の種類及び総数  
     普通株式 6,221,000株
- (2) 当事業年度の末日における自己株式の種類及び数  
     普通株式 47,274株
- (3) 当事業年度の末日における新株予約権（権利行使期間の初日が到来していないものを除く。）の目的となる株式の種類及び数  
     普通株式 45,000株

## 6. 税効果会計に関する注記

繰延税金資産の発生は、製品保証引当金、未払賞与、研究開発費及び株式報酬費用などでありま  
 す。

## 7. 金融商品に関する注記

### (1) 金融商品の状況に関する事項

当社は、必要資金については通常の営業活動で獲得した資金から充当することを基本方針としており、借  
 入については資金需要が発生する都度、検討することとしております。

また、資金運用は行っておりません。

売掛金に係る顧客の信用リスクは、与信管理によりリスク低減を図っております。

### (2) 金融商品の時価等に関する事項

2022年12月31日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりでありま  
 す。

また、現金及び預金、売掛金、買掛金、1年内返済予定の長期借入金、未払金及び未払法人税等につい  
 ては、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、注記を省略してあります。

(単位：千円)

	貸借対照表 計上額	時価	差額
差入保証金	30,841	30,713	△128

### (3) 金融商品の時価の適切な区分ごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレ  
 ベルに分類してあります。

レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した  
 時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれ  
 ぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類してあります。

#### ① 時価をもって貸借対照表計上額とする金融資産

該当事項はありません。

#### ② 時価をもって貸借対照表計上額としない金融資産

(単位：千円)

区分	時価			合計
	レベル1	レベル2	レベル3	
差入保証金	－	30,713	－	30,713

(注) 時価の算定に用いた評価技法及びインプットの説明

#### 差入保証金

差入保証金の時価については、その将来キャッシュ・フローを返還予定時期に基づき、社債の調達利回  
 り等適切な指標で割り引いた現在価値により算定しており、レベル2の時価に分類してあります。

## 8. 収益認識に関する注記

(1) 顧客との契約から生じる収益を分解した情報  
当事業年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

(単位：千円)

	sinops事業
一時点で移転される財又はサービス	415,470
一定の期間にわたり移転される財又はサービス	1,039,706
顧客との契約から生じる収益	1,455,177
その他の収益	—
外部顧客への売上高	1,455,177

(2) 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

収益を理解するための基礎となる情報は、「1. 重要な会計方針に係る事項に関する注記 (4)収益及び費用の計上基準」に記載のとおりです。

(3) 当事業年度及び翌事業年度以降の収益の金額を理解するための情報

①顧客との契約から生じた債権及び契約負債の残高等

(単位：千円)

	当事業年度
顧客との契約から生じた債権（期首残高）	187,614
顧客との契約から生じた債権（期末残高）	273,806
契約負債（期首残高）	74,144
契約負債（期末残高）	132,486

契約負債は、主に、クラウドサービス及びサポートサービスなどに対する契約期間分の前受金であり、収益の認識に伴い、概ね翌事業年度に取り崩されるものであります。

当事業年度に認識した収益のうち期首現在の契約負債に含まれていた額は55,455千円であります。

②残存履行義務に配分した取引価格

残存履行義務に配分した取引価格の総額及び収益の認識が見込まれる期間は、以下のとおりであります。

(単位：千円)

	当事業年度
1年以内	468,776
1年超	138,505

## 9. 1株当たり情報に関する注記

- (1) 1株当たり純資産額 249円75銭  
(2) 1株当たり当期純利益 24円91銭

## 10. 重要な後発事象に関する注記

該当事項はありません。